

# 園長だより

二十二年号三十年十二月  
竹鼻保育園  
園長 川出昭順

報恩講話法話ということまで考えていたら、せりざわしゆんすけ 芹沢 俊介と  
いう教育評論家の本を読み、深く考えさせられました。  
「養育」という保育園の子どもたちにも関わる本でした。

り、歩行者天国へ車で突っ込み、更に倒れた人々を刺し  
殺すとい  
う前代未  
聞の事件  
がありま  
した。犯  
人は加藤  
智大とい  
う二十五  
歳の男で  
うしてこ  
のような  
凶悪な事  
件が起こ  
ったのか  
を検証し  
、そこに  
養育につ  
いて問題  
提起した  
本です。  
「教育家  
族」とい  
うキーワードがポイントです。  
芹沢さんは家族の問題に提言を続ける評論家として有名  
です。読んでみて下さい。



マグロは大きいな。さくら組の食育です。

## 教育家族

教育家族化された親は、学校での成績がそのまま子ども  
の将来の展望を開いていく、そのような価値観にとら  
えられていきます。そこから、子育ての目的が良い成績を  
取れる子、良い学歴につける子の養成にあるといった家  
族をいいます。そのような家族のあり方を教育家族とい  
うふうに呼ぶことができます。教育家族の特徴は、比較  
と評価です。自分の子を常に他人と比較しないではいら  
れないということ、それから成績でもってその子ども  
の価値を決めてしまう。比較と評価はそのまま社会のあり  
方、学校のあり方でもあるわけです。それが家庭にまで  
入り込んで子どもに適用されるのです。

教育家族は、教育の美名に隠されていますが、子ども  
に「いい子」を求めるといふ点で、暴力のシステムです。  
その教育家族の中で、子どもが最初に殺されている。最  
初に子殺しがあった。その子殺しというのは親の都合で  
子どもの自由を一切奪い、親の所有物にすることです。  
これが最初に起きているのです。どんなところで教育家  
族の犯罪を感じたかというのと、根拠は加藤智大が携帯サ  
イトに書き込んだ文章なのです。書いてあることは、で  
たらめだ、虚偽だというふうにはとても思えない。とり  
わけ過去に母親から受けた仕打ちについて書いてあるも  
のは実に具体的で、客観的です。読むこちら側も素直に  
「そうだったの」と思える。なるほど、幼いときからそ  
こまで母親にひどく扱われていなかったら、こんな事件  
は起こさなかつたらうな、そういうふうには思えてしま  
うような文章でした。

## 彼の母親

加藤智大は、自分の起こした事件を母親のせいだと言おうとしているわけではありません。しかし、読む側は母親のあり方、母親との関係を抜きに事件を語ることはできないであろう、と考えざるを得ない、それくらい重要なことが書かれているのです。教育家族化した家族の中で、加藤智大が子ども時代に母親にどんな扱い方をされてきたか、彼の書き込みからそのほんの一例をだしてみます。学校に提出する作文とか絵の宿題は、親が書いたと言っています。母親の手が入っていない作文や絵は一つもないと書いています。そうやって提出した作品で、教師の称讃を得た、でもその称讃は自分の力ではない、そのようなことを加藤智大は書いています。ここを見ただけでも、子どもの受けた屈辱の思いは、子殺しというに値する、そういうふうに見える母親の行為だと思います。

学びにおいて、ぼくらが子どもに伝えることは、どんなに貧しいものしかできなくても自分の力で立ち向かうか、とね、ということなのです。そこでは子どもの主体性に全権を委ねていかなくはならない。その上での手助けでしょう。ところが加藤智大の母親は、母親というだけで、子どもの気持ちや願望、意思を力づくでもって押しつけ、自分の意向を、子どもの生きる場における主体の位置に据えてしまったのです。このような横暴さに対して子どもは、ものとする道は二つしかないでしょう。強く反発するか、横暴さを受け入れ、自分の主体を引込めめるか。

## いい子になる

子どもである加藤智大は、自分の主体性を引込められたのです。要するに「いい子」になったのです。「いい子」の定義は、自分を殺して親の意向を生きる、ということになると思います。「いい子」を生きたためには、自分の意思とか欲望とか希望を殺さなくてはならない。殺すことによっては「いい子」を生きたエネルギーをくみ出さなくてはならないのです。そこが「いい子」の辛いところだと思います。遅かれ早かれ、どこかの時点で、殺すべき自分が枯渇してくるのは避けられないということでもあるのです。

多くの場合、早ければ小学校四年生くらいから枯渇がはじまる、殺すべき自分が残り少なくなってくるために、切れてくる。それまで勉強でも運動でもクラスのトップ近くを走っていたのが、しだいに息切れして後退してくるのです。大体小学校四年生頃から遅くとも高校二年生くらいに、枯渇してきてしまいます。たとえ枯渇せずともその時期を乗り越えたとしても、大学に入って動けなくなる。あるいは、職について間もなく、息切れがはじまるのです。

いい職について、いい配偶者を得て、というふうな展開を、たとえ持てたとしてもそのことで、つまり自分を殺して親の意向を生きてきたという口惜しさ、怒り、屈辱というものは、ずっと残ってしまう。それゆえにどこかの時点で親に対する復讐というようなことは起きかねない。子どもに「いい子」を求めるということは、暴力です。子どもを存在の根本から損なうことになるのです。